

## 戦前台湾における本島人信者の信仰形態

## 本島人信者と内地人信者

前回(5月号)は、戦前の天理教による台湾伝道が邦人伝道にとどまっていた、つまり主な布教対象が本島人(現地人)ではなく、内地人(在留邦人)であったという従来の研究の問題点について考察した。筆者は、台湾総督府から毎年発行されていた『台湾総督府統計書』に掲載されている天理教信者の内地人と本島人の割合の推移から、たしかに台湾において天理教の布教が始まった当初は本島人信者がその多くを占めていたが、徐々に内地人信者も増加し、1928(昭和3)年にはその数が逆転するとはいえ、だからといって信者が内地人に大きく偏っていたとはいえないということを明らかにした。つまり、戦前の台湾における天理教は本島人信者も内地人信者も同じくらいいたのである。そして、従来の研究で指摘されてきた邦人伝道にとどまっていたという指摘と上記の統計資料との間の矛盾を理解する上で鍵となるのは、布教所と本島人エリートが存在にあると述べた。その理由は以下のとおりである。

戦前台湾で設立された教会の教会長はすべて内地人であった。そのため、台湾の天理教における幹部が内地人で占められていたことにより、台湾における布教はほとんど内地人を対象にしたものに限定されていたという評価につながったと考えられる。これは本島人エリートの養成が不十分であったことの裏返しでもある。つまり台湾における天理教の活動が内地人幹部に率いられており、本島人がさまざまな意思決定の場に参与することは極めて限定的であったと推察されるのである。では、内地人と同じくらいの人数がいた本島人信者はどのような信仰や布教活動をしていたのか。筆者は、彼らは教会ではなく、布教所や個人宅などを布教の拠点として、本島人から本島人へと布教を展開していたと考えるのである。

これまで戦前の天理教による台湾伝道についての研究は、台湾伝道庁や教会に注目されて行われてきたため、教会ではない布教所や信者宅などの活動の実態をうまく把握することができなかったのではないと思われる。では、当時の本島人の信仰形態を解明するにはどのようなアプローチがあるだろうか。筆者は、本島人信者の視点から当時の天理教認識や信仰実践に注目する必要があると考える。それは言い換えれば、宗教文化や日常的な信仰実践に着目した文化人類学的アプローチで信仰の姿を明らかにしていくということである。

## 本島人信者の天理教認識と信仰実践

文化人類学的アプローチにはフィールドワークが不可欠であるが、戦前の内地人信者の天理教認識や信仰実践を知っている台湾人信者は現在ではほとんどいない。そこで参考となるのは、1983(昭和58)年に出版された金子圭助著『炎の女伝道者 加藤きん』(天理教道友社)である。加藤きんは内地人布教を専門にした嘉義東門教会の初代会長である。この本の後記に書かれているように、この本を執筆するために金子は台湾でも聞き取り調査を行ない、生前のきんを知る林明月(当時84歳)と頼楊珠珍(当時80歳)を訪ね、加藤きんの生の人間像、実際の布教の様子を聞いている。さらにほかの当時を知る現地の信者とも会っている。そのため、本書は現地の宗教文化や内地人の日常的な信仰実践に着目した文化人類学的アプローチにとって貴重な資料だと言える。その本の中で、次のような記述がある。

民衆(漢人)は廟宇に詣でると必ず線香をあげる。線香の最も多い、つまり熱心に信仰されているのは媽祖廟と王爺廟(疫病神)である。また、彼らの個人宅は正面に正庁があり、向かって右に大房、左に次房がある。正庁正面に祖先の位牌を置き、位牌の左右に媽祖、観音菩薩、関公(関羽)、財神などを安置している。正庁は来客の応接間であり、同居家族の共同団らんの部屋でもある。民間信仰の神々は誕生日があり、降誕日を祝うと神が非常に喜ばれると信じられている。そのため、神の誕生祝いは重要な祝い日である。嘉義東門教会の月次祭は毎月23日で、台湾では媽祖の誕生日にあたる。内地人信者は月次祭のことを神様の誕生日と言って祝いに来た。金紙・銀紙は霊界の通貨で、神に祈るには金紙・銀紙を焼き、線香を焚き、お供え物は祈りを済ませると持参した人がまた持ち帰るのが習慣である。きんは初めのうち台湾の風習を黙って見守り、信者たちのなすがままにまかせていた。きんは線香をあげず、金紙や銀紙を焚かず、玉串を捧げた。きんの祈る仕草を眺めて、拝々という台湾式の拝み方で頭を床につけて拝んでいた。金紙・銀紙を焚かずに祭典を勤めるようになるまでかなりの日数を要した(118~119頁)。

また、二代会長である加藤鍋吉時代の月次祭後の光景について、大勢の内地人信者が一升瓶を抱えて神を持ってぞろぞろ帰っていったと記述されている。この一升瓶には「神水」が入っている。教会の月次祭に水の入った一升瓶が300本も供えられた。山名系統の教会では諸井国三郎初代会長の末女ろくが水のさづけを頂いた理によって、部内先々の教会で「神水」によるおたすげが多かった。そのため、加藤きんの時代から神前に水をお供えし、おさがりの「神水」は「丹水(台湾語)」と言って尊んだ。信者たちはこれを飲むと虫が湧かない、また腹痛が治ると言ったり、神饌としてお供えした塩をこれに混ぜて傷のところへ湿布すると傷が治ると信じたりしていた。病人は毎朝毎晩教会に参拝し、鍋吉会長かその妻であるまさにおさづけを取り次いでもらい、帰りに「神水」をもらって帰った。またようぼくは、この「神水」を持っておたすげに回った(137頁)。

この台湾における天理教と「神水」については台湾省文献委員会が出版した『雲林縣郷土史料』(1998)にも記述がある。この本は台湾中南部にある雲林県の各地域で現地の歴史に詳しい人たちを集めて聞き取り調査をまとめたもので、日本統治期の宗教状況について答えた中に、「以前は天理教がありました。彼らは霊水を飲めば病気が治ると教えます。この霊水は何とも言えないもので、私の長男が病気になりましたが、霊水を飲んで良くなりました。私はおそらく解熱作用があったのだと思います。」(筆者訳・456頁)

このような記述から、当時の内地人信者が各家庭(正庁)における祖先崇拝や土着の神々への信仰の一つの対象として天理教を信仰していたこと、また信仰実践や布教活動において、特に病たすけでは「神水」が用いられ、天理教の内地人への広まりにおけるおさづけの取り次ぎとともに、それが重要な役割を果たしたということが分かるのである。

## [参考文献]

金子圭助(1983)『炎の女伝道者 加藤きん』天理教道友社。  
台湾省文献委員会編(1998)『雲林縣郷土史料』台湾省文献委員会。